

『母がしてくれる「当たり前」』

貴志川中学校 1年 新宅 佑三奈

「明日の準備した？」「課題は？ちゃんと終わらせた？」母は、いつも私達に色んな事を言ってくる。いつでも言ってきて、正直「めんどくさい」と思っている。でも、これが母の愛であることを、私は知っている。

私の父は単身赴任をしていて、月曜日の朝早くに家を出て、金曜日の夜遅くに帰ってくる。だから、父がいない平日、家の事をしてくれるのはいつも母だ。家事はもちろん、沢山の送迎や、買い物などもしてくれる。私は3姉妹で、長女高3、次女高1、そして私。三女中1。全員思春期真っ最中で、父や母に反抗することも少なくない。その相手をするのも平日はもちろん母。でも、どんなに喧嘩をしても必ずご飯、洗濯、お弁当、送迎。私たちが必要な事は当たり前かのようにだまってしてくれる。私達姉妹はそんな「当たり前」になれていた。

ある日、私は胃腸炎にかかってしまった。入学式の5日前で、入学式も出られるか怪しかった。母はすぐ病院に連れて行ってくれて私を看病してくれた。とてもありがたいと思うと同時に、親としてそれが「当たり前」だと思っていた。そして私が完治した頃、母も胃腸炎にかかってしまい、その日は平日で、我が家の家事は止まってしまった。母はしんどい中で自分で病院に行っていた。ここで忘れていた事に気づいた。母が「当たり前」にしてくれる事は、「当たり前」ではなかった事を。小さい頃はわかっていたのに、今ではそんな事をすっかり忘れていた私が恥ずかしく情けなくなった。母の体調は入学式までに回復せず、結局私と姉の入学式には出られなかった。でも家に帰ると母が「当たり前」かのように洗い物をしていた。そして私を見て「入学式どうやった？友達、できそう？」そう聞いた。人見知りで自分から話しかけられるタイプではない私を母はそれまでもよく心配してくれていた。その事で喧嘩になることも多かったが、自分がしんどい中でも私の事を心配してくれる母はなんてすばらしいのだろうと思った。私がうつした事をあやまっても「あんたからうつったんちゃうよ」と笑ってくれた。完治した後、また「当たり前」のように家事をしてくれる母を見て、きちんと日常から感謝を伝えようと思った。

小さい頃から母は厳しかった。特に礼儀のことを厳しく言われて、外では騒がないとか挨拶をするとか、お礼を言うとか、いつも言わなかったり騒いだりするととても怒られていた。そのことを小学4年生の頃母に「昔厳しかったなあ」と話をしたら、母が「怒らんだだけが優しさじゃない」と言った。私は最初意味がわからなかった。「優しいなら怒らない」と思ったからだ。でも母は、「怒られない

まま、それが悪いことと知らずに大きくなったら苦労するのは子ども自身。そんなの優しさじゃないやろ？」私はこの言葉で母が昔私たちに厳しくした理由がわかった。確かにお店や病院に行っても騒いでいる子供に何も言わなかったり、優しくしか言わない人たちをよくみかける。でも母は忙しくても、やることであっても「当たり前」のように私たち姉妹の「人間性」を育てる事を優先してくれていたんだと気づいた。

私は将来、母のような「お母さん」になりたい。子供がいけない事をしたらしつかり叱って、時には優しくして、「当たり前」ではないことが「当たり前」にできる、母のような素晴らしいお母さんに、私はなりたい。

